

「戦争と平和！」

第 10 回

一枚の写真が語るもの

稲村 洋二



「焼き場に立つ少年」

ここに一枚の写真があります。この写真は米国の報道写真家ジョー・オダネル（Joe O'Donnell）氏が1945年長崎の爆心地で写した写真です。撮影当時の状況をオダネル氏は次のように述べています。

“佐世保から長崎に入った私は、小高い丘の上から下を眺めていました。すると、白いマスクをかけた男達が目に入りました。男達は、60センチ程の深さをえぐった穴のそばで作業をしていました。荷車に山積みした死体を、石灰の燃える穴の中に次々と入れていたのです。

10歳ぐらいの少年が歩いてくるのが目に留まりました。おんぶひもをたすきにかけて、幼子を背中に背負っています。弟や妹をおんぶしたまま、広っぱで遊んでいる子供達の姿は、当時の日本でよく目にする光景でした。しかし、この少年の様子ははっきりと違います。重大な目的をもってこの焼き場にやってきたという強い意志が感じられました。しかも裸足です。少年は焼き場の淵まで来ると、硬い表情で目を凝らして立ち尽くしています。背中の赤ん坊はぐっすり眠っているのか、首を後ろにのけぞらしたままです。少年は焼き場のふちに5分か10分立っていたのでしょうか。白いマスクの男達がおもむろに近づきゆっくりとおんぶひもを解き始めました。この時私は背中の幼子が既に死んでいる事に初めて気付いたのです。男達は幼子の手と足を持つと、ゆっくりと葬るように、焼き場の熱い灰の上に横たえました。まず幼い肉体が火に溶けるジュウっという音がしました。それから眩いほどの炎がさっと舞い立ちました。真っ赤な夕日のような炎は直立不動の少年のまだあどけない頬を赤く照らしました。その時です。炎を食い入るように見つめる少年の唇に血がにじんでいるのに気がつい

たのは。少年があまりきつく噛みしめている為、唇の血は流れることもなく、ただ少年の下唇に赤くにじんでいました”

何と残酷で悲惨で悲しい写真でしょうか。この写真は戦争のむごさを如実に物語っています。戦争の悲惨さは誰もがよく知っていて多く語られます。我々が生きてきた昭和と平成、特に昭和20年8月15日以降日本は戦争のない平和な、世界でも稀有な国のひとつです。平和について語るとき戦争の悲惨さを語ると同時に、この戦後70年の平和はどのようにもたらされたのか元号が変わるこの時期に考えてみる必要があることだと思います。国家運営の基盤は「憲法」です。この日本国憲法の9条が戦後の日本を平和に導いた大きな力となったことは事実だと思います。しかしながら、憲法前文に述べられている、日本が武力をもたない理由として“平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して我らの安全と生存を保持しよう”と決意した”と書かれています。でも、現状はそうでしょうか。覇権を露わにして国際法を破って海洋進出を進め、国内では人権を弾圧している国、一方では歴史を自分の都合のよいように変え国際法、国家間の契約も無視あるいはやぶり、平気でうそをつく、民度の低い国が存在する現状です。国家間の紛争を解決するのにリベラルな考え方を持つ人達は“外交交渉で解決すべきで戦力は必要ない”とよくいいます。そして憲法は変えるべきでないといえます。本当にそうでしょうか？外交力は国の力です。そこに含まれるのは“経済力、社会基盤の成熟度、人権、自由、民主主義そして安全保障力”です。戦後の日本の平和も日米の安全保障条約の“抑止力”によりもたらされた面が大きいと考えます。これからの平和を考えると我々は日本が“凜”として立つために政治をよく見極めることが必要だと思います。

オダネル氏は帰国後、周りから非難されながらも反核運動を続けられ、「焼き場に立つ少年」を長年探されましたが見つけれなかったとのことです。2007年8月9日死去（享年85才）奇しくもその日は長崎の原爆記念日でした。

